

9月7日（日）マルコの福音書16章1～8節

「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているの
でしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の
納められていた場所です。」（6節）

安息日が終わったので、香料を買い、油をイエスの遺体に塗りに行こうとマグダラのマリア
とヤコブの母マリアとサロメが墓へと向かいました。「だれが墓の入り口にある石を転がしてく
れるでしょうか」と話していましたが、すでに石は転がしてあり、墓の中に入ると、真っ白な衣
をまとった青年が座っていて、「あの方はよみがえられました。ここにはおられません。」とキ
リストの死からのよみがえりを告げました。さらに、その青年は、「さあ行って、弟子たちとペ
テロに伝えなさい。「イエスは、あなたがより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、
そこでお会いできます。」と。」と言いました。

私たちは、弟子たちのようにこの目でよみがえられたキリストを見たわけでもありませんし、
女たちのように空になった墓を見たわけでもありません。しかし私たちは信仰により私たちの
よみがえりの初穂としてのイエスキリストの死からのよみがえりを信じ、自らもいつの日にか
新しいからだ、朽ちないからだ、御霊のからだ、栄光のからだによみがえることを信じて喜ん
でいます。そして、いつの日にか必ず成就する時が来ると信じて、その日を待ち望むことがで
きることは幸いです。それと同時に、キリストのよみがえりを知らされた女たちは、弟子たち
にガリラヤでよみがえられたキリストにお会いできることを伝えるようにと命じられています。
そしてキリストのよみがえりを信じている私たちに対しては、全人類の贖いのために十字架に
かかれて死なれましたが、死からよみがえられて、今も生きておられるキリストを宣べ伝え
るようにと命じられています。

7節で「弟子たちとペテロに伝えなさい」とペテロが名指しされています。これは、ペテロが
イエス様を三度否定したことを気遣ってのことだろうと思われれます。私たちも信仰生活におい
て失敗をしたり、後悔したり、罪を犯したりとの連続でしょう。完璧な信仰生活を送ることは決
して期待されていませんし、罪を犯したからといって、イエス様は私たちを見捨てることは決
してありません。むしろ、罪を犯して悔やむ私たちを気遣い、イエス様ご自身から私たちに会
ってくださり、みことばにより私たちに励まし、力づけ、信仰により立ち上がらせてくださる
のです。主のあわれみに心から感謝しましょう。

9月8日（月）マルコの福音書16章9～11節

「彼らは、イエスが生きていて彼女にご自身を現された、と聞いても信じなかった。」（11節）

9節～20節までが括弧の中に入れられていて、9節の欄外注を見ますと、「9～20節を加える写本は多いが、重要な写本には欠けている」とあります。すなわち、9～20節を含まない写本もありますので、エウセビオスやヒエロニムスのような初代教父の中には、その部分を偽作として拒否する人たちもありました。実際に9～20節を詳しく見ますと、マルコの福音書において使われない言葉や表現も用いられています。ですから、恐らく9～20節は後代になってつけ加えられたというのが有力ではないかと思われます。しかし、これまでの長い教会の歴史の中でこの部分もマルコの福音書の一部として受け入れられてきたわけですし、解釈の時には他の福音書や新約聖書全体を見ながら注意深く解釈すべきではないかと思われます。

今日のマルコの福音書16章9～11節は、ヨハネの福音書20章11～18節のことだろうと思われます。マリアは、「イエスと一緒にいた人たち」すなわち弟子たちが嘆き悲しんでいるところに言って、そのことを知らせましたが、「イエスが生きていて彼女にご自身を現された、と聞いても信じませんでした。」私たちも、日々の歩みの中で、嘆き悲しむことがあるでしょう。辛く苦しいと感じる場面が人生の中にもあるでしょう。その中であって今日のみことばが私たちに教えることは、よみがえられて今も生きておられるイエスを見失ってしまうほどに嘆き悲しむことがあってはならないということです。大いに嘆き悲しむことがあっても、どこかで信仰をもって復活のイエスを見上げる信仰が与えられたいと思われます。

9月9日（火）マルコの福音書16章12～14節

「その後イエスは、十二人が食卓に着いているところに現れ、彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった。よみがえられたイエスを見た人たちの言うことを、彼らが信じなかったからである。」（14節）

12節の記事は、ルカの福音書24章13～32節の記述と一致します。また13節は、同じルカの福音書24章33～35節のことだろうと思われます。そして「十一人が食卓に着いているところに現れ」というのは、ルカの福音書24章41～43節で、よみがえられたイエス様が焼いた魚を一切れ召し上がったことから分りますし、「彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった」というのは、ルカの福音書24章36～38節でイエス様が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた時に、彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見て

いるのだと思ったとあります。その弟子たちに「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのか」とイエス様が言われたことを言っているのでしょうか。

昨日の箇所でも16章11節にも「信じなかった」とあり、13節「彼らはその話しも信じなかった。」14節「彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった。よみがえられたイエスを見た人たちの言うことを、彼らが信じなかったからである。」と、弟子たちが不信仰であったことが語られています。ここで私たちが間違っはならないことは、聖書は言われたこと、聞いたことを何でも信じなさいと言っているわけではありません。そうではなく、イエス様が弟子たちとともにいる間、イエス様が苦難を受けることと、苦難の後によみがえることにより栄光を受けられることをずっと語っておられました。それにもかかわらず弟子たちが信じなかったことを責めておられたのです。もっと言えば、イエス様のことばと弟子たちの信仰が結びつかなかったことが問題だということです。私たちはいかがでしょう。私たちの信仰が聖書のみことばと結びつき、それが私たちの信仰を形成しているのでしょうか。逆に、聖書のみことばと結びつかず、不信仰のまま信仰生活を送っていることはないでしょうか。

9月10日(水) マルコの福音書16章15～20節

「弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」

15節は、マタイの福音書28章18～20節の大宣教命令を思い出させます。シュバイツァーが、宣教の命令が不信仰を非難した直後になされたことは、特に適切であったと言います。なぜなら、信仰こそが弟子たちを宣教へと導くからです。さらに、ここで「全世界に出て行き」と言われて、異邦人に対する福音宣教が意識されています。イエス様が地上におられる間の教えとみわざは、ユダヤ人に限られていましたが、イエス様が弟子たちの見ている前で天に上げられ、神の右の座に着かれた後、聖霊が下り、そこから全世界へ向けての福音宣教が開始されました。20節で「弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた」とありますが、イエス様が命じられたとおり、それはまさに全世界規模での福音宣教へと発展していきました。信じる人々には次のようなしるしが伴いますと言われて、いくつかのことが例示されています。

「わたしの名によって悪霊を追い出し」ということについては、使徒の働き16章18節では、パウロが古い霊を追い出したということがありました。「新しいことばで語る」というのは、イエスキリストを通しての福音のことばを指しているのでしょうか。「その手で蛇をつかみ」とは、

使徒の働き28章1～5節では、まむしが手にかみついても、火の中に振り払い、パウロは何の害も受けませんでした。「たとえ毒を飲んでも決して害を受けず」が何を指しているのかは不明です。実際に、聖書のどこにも記述がなく、それを聖書的根拠がないと考える人もあります。まむしが手にかみついても害を受けなかったことと、たとえ毒を飲んでも決して害を受けなかったいうことを結びつけようとする人もありますが、それが必ずしも正しいとは言えません。病人に手を置けば癒されますというのは、使徒の働き28章8節にパウロによるプブリウスの父の癒しが出てまいります。マルコの福音書6章13節にも弟子たちが「多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒した」ことが記されていますが、まさに信じる者にはイエス様をご自分にある権威を授けてくださるとも言えるでしょう。

もう一度20節を見ますと、「弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた」とありますが、それと同時に「主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた」とありますが、ここで教えられることは、宣教は弟子たちだけの孤独な働きではなく、イエス様とともに働いてくださること、それと同時にみことばを確かなものとされたとありますように、伝えるべきは、みことばだということです。私たちがイエス様がともに働いてくださることを信じて、みことばを宣べ伝え続けたいと思わされます。

9月11日(木) サムエル記第一1章1, 2節

「エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといった。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。」

今日からサムエル記を学んでまいりたいと思います。サムエル記は、サムエルの誕生によって始まります。サムエルは、イスラエルの初代王サウルとその後に王政を開始したダビデに油を注ぐことで、この二人の人物をつなぐ重要な役割を果たしました。それとともにイスラエルは神を王とする神政政治の国でしたが、民が王を求めることにより王政の国へと変っていきましたが、そのいきさつをサムエル記を通して知ることができます。

まず1節で、サムエルの家系が語られています。父親はエルカナで、父親であるエルカナの家系が記されていることと、エルカナが二人の妻を持っていることを考え合わせますと、この人は有力な家系の出であったことがわかります。2節には、エルカナの妻であった二人の女性が出てまいります。一人は、ペニンナで子がいましたが、もう一人のハンナには子がありませんでした。この当時のイスラエル社会においては、子が与えられることが神の祝福であり、さ

らに軍事力や労働力の根幹である男の子を産むことがさらなる祝福と考えられていました。なぜ主は、エルカナとハンナに目をとめられ、その二人に与えられたサムエルを用いられたのかは分かりません。しかし、主はみこころのままに人を選び、その人物を通して働かれることを私たちは、聖書のさまざまな人物を通して知らされます。

ここには記されていませんが、もしかするとハンナが不妊だったので、ペニンナを二人目の妻として迎えた可能性があります。いずれにいたしましても、ハンナにとって不妊であること、そしてもう一人の妻であるペニンナには子があることは、ハンナにはとてもつらいことであったと想像できます。私たちも、自分が不利な立場に置かれたり、人よりも劣っている状況を見せつけられることはつらいことです。しかし、そのような時にこそ神は働かれるのであり、神がそのような者を用いて、ご自身の栄光を現す時です。そのことを信じましょう。

9月12日（金）サムエル記第一1章3節

**「この人は、毎年自分の町から上って行き、シロで万軍の主を礼拝し、いけにえを献げること
にしていた。そこでは、エリの二人の息子、ホフニとピネハスが主の祭司をしていた。」**

この人とは、エルカナのことですが、「シロで万軍の主を礼拝し」とありますが、恐らくその当時はシロに主の契約の箱が安置されていた主の家があったのだらうと思われます。出エジプト記23章14～17節を見ますと、年に三度、主のために祭りを行うことと、年に三度、男子はみな、主の前に出ることが命じられています。エルカナが、この律法通りに年に三度主の御前に出るために、シロへ出かけていたかどうかは分かりかねますが、少なくとも毎年シロで万軍の主を礼拝し、いけにえを献げることにはしていたことは間違いありません。私たちも信仰生活の中で主のためにと、何か人々の注目を集めるようなことをするよりも、まずは礼拝を大切に
する信仰を養いたいと思わされます。

ここにエリの二人の息子、ホフニとピネハスが出てまいります。ここには名前が出て来ただけですが、この後彼らの悪事といいますか、罪が明らかにされてまいります。まさに、彼らの罪の姿は、混乱した士師の時代をそのまま反映しているように思われます。先ほども申しましたが、心から主を礼拝していたエルカナと、祭司という立場上主の家にいたホフニとピネハスでは、あまりにも大きな違いがあったことを思います。私たちは心から主を礼拝し、心から主に仕えるために教会に集っているのでしょうか。それともクリスチャンだから、ただそこにいるだけなののでしょうか。

9月13日（土）サムエル記第一1章4，5節

「ハンナには特別の受ける分を与えていた。主は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。」（5節）

4節でエルカナは、主にいけにえを献げ、家族のそれぞれが受ける分を分け与えました、これは、いけにえを献げた後の食事で出される肉の分配のことを指しています。5節でエルカナは、ハンナにだけ特別の受ける分を与えます。欄外注にもありますが、このヘブル語の直訳は、「一つの受ける分の二つの鼻」という意味になります。理解しがたい文章であり、それゆえに多くの人々から解釈に対する提案もなされていますが、実際に意味を特定するには至っていません。そして、なぜエルカナがハンナに対して、そのような特別なことを行ったのかという理由の一つが、主が彼女の胎を閉じられて不妊であったにもかかわらず、彼女を愛したからであり、人によっては、エルカナのハンナに対する償いの気持ち、すなわちペニンナをもう一人の妻として迎えたことの償いの気持ちもあったのではないかと言います。いずれにいたしましても、このようなエルカナの特別な配慮は決してハンナの心を慰めることはありませんでしたし、逆にペニンナのねたみによる反感を買うこととなってしまいました。私たちも何か悲しみや心の痛みがあると、人からの慰めを求める傾向がありますし、また私たちもそのような人たちを何とかして慰めなければと考えます。しかし、本当の意味で人を慰めることができるのは主だけであり、人の力には限界があることを知らなければなりません。そして、ハンナの胎を閉じておられたのが、主であることはだれも知りませんでした。主がみこころによって、そのようにされていたのです。だからこそ、すべての者が主の御前にへりくだって、すべてを主にゆだねるべきでした。私たちにも、主はみこころによって問題をそのままにしておかれることがあります。だからこそ、私たちは静かにして、すべてを主にゆだねる信仰が必要なのです。